

若松の海を守りたい



若松の海は水質がとてもよく、水の層が何層にも重なったような深い青色でキラキラと輝く遠浅の海です。夏になるとたくさんの家族が遊びに来ます。僕も小さい頃からよく家族で遊

びに行っていました。

しかし、ここ数年は海へ行つてみると、ペットボトルなどのプラスチックゴミが海岸に打ち上げられていて、昔のようなきれいな海ではありません。

このようにプラスチックゴミが海岸に打ちあげられているのは、若松の海だけでなく日本全国で起きています。また、近年のニュースで海に漂流しているプラスチックゴミをエサだと間違えて海洋生物が食べてしまうというのをよく聞きます。このニュースを聞くととても悲しい気持ちになってしまいます。

そこで、プラスチックゴミについて調べてみると、様々な対

策を行っているということを知りました。

例えば、買い物で使うポリ袋を有料化にしてマイバック持参を促したり、プラスチック製のストローを紙ストローに変えるなど企業での取り組みや、僕のような中学生でもできることがたくさんありました。そこで、僕が若松の海を守るために今できることを三つ考えてみました。

一つ目は、プラスチックの問題について正しい知識を身につけることです。上智大学大学院地球環境学研究所教授の織朱實さんによると、海に流出したプラスチックは分解されにくいため、何十年たつても海に残りつづけるそうです。そのようなプラスチックのことを、マイクロプラスチックとかマイクロビーズと呼びます。マイクロプラスチックは、とても小さく細かいため海洋生物が間違えて食べてしまいます。また、その魚を人間が食べて、有害化学物質が体内に蓄積されて、がんの発生などの健康被害や環境汚染が起きることにもつながってくるので

洞北中学校

三年

内田

うちだ

暉人

あきと

す。海に漂流しているプラスチックの量は、毎年八百万トン以上ともいわれており、このペースが続いてしまうと二千五十年には海に漂流しているプラスチックの量が魚の量を超えるともいわれています。このようなことを防ぐための第一歩はプラスチックの害を知ることと、きちんと理解することだと僕は考えます。

そして、知識を得た上で僕ができること二つ目は、日常生活の中でプラスチックゴミを出さないように気をつけることです。買い物にはマイバックを持参し、ポリ袋をもらわない、ペットボトル飲料ばかり買うのではなく、水筒を使うなど日常生活で僕は心がけています。他にも、地域のごみ拾い活動に参加したり、海に漂着したゴミを拾うことも僕にできることです。このような小さな積み重ねが海洋生物が安全に生きられる環境づくりに役立つと僕は考えます。

三つ目は、プラスチック問題やその対策について家族や友人などの身近な人に伝えていくことです。周りの人たちに伝えることで、一緒に問題について考えたり、考えてもらうことで、プラスチック問題への危機感をもってもらえるのではないのでしょうか。そうすることで、プラスチックを減らす活動を一緒にしてもらえるかもしれません。

身近な人の意識が変われば、地域の様子が変わる。それが若松の海を守ることにつながるのではないのでしょうか。

若松の海を守るために、今僕ができることは、海の問題について知ること、対策を考えて実行すること、身近な人に伝えることの三つです。若松の大切な海を守ることが、日本の海を守ることにつながっていく、それが世界の海を守ることにつながるのだと思います。

僕たちが今できることを最大限に継続していくことが大事だと僕は考えます。



石峯中学校

防災・減災の取り組み

朝倉市被災地訪問を

経験して



皆さん、「防災・減災」につ

いて考えていますか。石峯中学校は海と山に挟まれた位置にあり、津波や高潮の危険、土砂災害の危険があります。災害時に自分の命を守ることができると

う私たちは防災・減災の取り組みを行っています。先日行われた生徒総会では、新聞紙スリッパを作っておこうという意見がありました。新聞紙を折って作成したスリッパは、避難所となる体育館の床の冷たさやガラスの破片から足を守るのに役立ちます。しかし、歩くと滑りやすく破けやすいといった課題もありました。生徒総会ではこれらの課題に対し、生徒から「ス

石峯中学校

二年

おがた
尾形

まなみ
真奈美

リッパの裏に輪ゴムを付けたら滑らないのでは」「新聞紙を二重にして作れば破れにくいのでは」といった意見がありました。このように私たち石峯中学校では、生徒たち自身で防災・減災について考えています。

また、8月に防災・減災の教育推進モデル校として、生徒会の代表2名が、朝倉被災地訪問に行ってきました。

1日目、私たちは平成29年7月の豪雨で被災した朝倉市の小学校に向かいました。そこに行く途中で見たのは、6年前の豪雨の爪痕でした。山肌が見えていたり、木は根がむき出しになったりしていて今にも崩れ落ちそうな悲惨な姿を見せていました。2日間の豪雨がここまで被害をもたらすのかと驚きました。小学校では講師の先生から、被災した時の状況について教えていただきました。被災時、朝倉の方々がどのように動いたかを時系列で説明していただき、テレビ越しに見ているだけでは分からなかった、被災当時の人の動きや流れが鮮明に伝わり

「ここでこんなにも恐ろしい災害が本当に起こったんだ。」と実感しました。

2日目は久留米にある防災学習センターで落語を交えた防災落語を聞きました。その中で伝えられたのは、「自分は大丈夫だ」という「楽観バイアス」を外すことが、災害時とても重要になるということでした。この楽観バイアスを外すことで、常に危ないと思いつながりながら行動でき、率先避難にもつながるとおっしゃっていました。

今私たちにとって災害は遠く離れた存在ではなく、生活のすぐ近くであり、常にどこかで考えておかなければならないものになっています。それでもつい私たちは「自分のところには災害は起きない。」「もし、災害が起きてもそんなにひどいことにはならない。」「と誤ってしまいます。講師の先生も「まさか自分たちのところでこんな災害が起こるなんて思ってもいなかった。」「とおっしゃっていました。確かにその認識を今すぐ変えることは難しいと思います。しかし私たちは備えることができます。いつ起こるか分からない災害に対して皆で備えていくことで災害を他人事ではなく、自分事として捉えるきっかけになっていくのではないかと思います。「備えあれば憂いなし」災

害時私たちが地域を支え、守ることができるように自分たち自身で考え実践していきたいと思えます。



人と人をつなぐ 「明るいあいさつ」



僕の願いは、いじめがなく誰もが安心して過ごせる二島中学校にすることです。

僕は今、生徒会で副会長として活動しています。二島中学校

では、毎月0の付く日に「あいさつ運動」をしています。生徒会執行部を中心に、各クラスの代議員とともに、登校してきた生徒と、元気よく気持ちの良い挨拶をし合う活動です。また、「オレンジリボン運動」という活動も行っていきます。いじめをしない、させないと誓った人が、胸にオレンジ色のリボンを付け、その意思を表明するという取組です。最初は、オレンジリボンを付けるだけで本当にいじめはなくなるのか疑問に思いました。実際に自分が付けてみると「相手にとって嫌な言葉になっていないかな？」など、少し立ち止まって物事を考えるようになり、いじめに対する意識が高くなったと思っています。「あ

いさつ運動」と「オレンジリボン運動」この2つの運動を通して、気持ちの良い挨拶から良い人間関係が作られていき、リボンの広まりからいじめゼロが達成されるのではないかと思います。

しかし時折、あいさつ運動をしていると思うことがあります。声が小さい人、目と目を合わせられない人、頭だけさげる人にも様々な理由があると思いますが、僕は、心の通い合う、声が響き合う挨拶になれば良いと思っています。

挨拶には、「人と人との関係を築く力」があります。地域の方に会った時、挨拶をしていると、時々、その方に話しかけられることがあります。「誰だろう？」と思う人もいるかもしれません。でも僕は、「優しいな」「良い方だな」と感じます。何故なら、その方が明るい表情と、明るい声で、挨拶をしてくれているということに気付いたからです。今では、いつも会う地域の方として、挨拶を交わし身近に感じています。そして、

二島中学校

二年

白石

墨

いつも見守って頂いていることに感謝しています。

「あいさつ運動」は、コロナウイルスが最も猛威を振るった時も、人数を半分に減らして続けてきました。先輩方も「挨拶」の大切さを考えられていました。活動の制限も緩和され、今年度は、運動に参加する委員会を代議員会だけでなく、他の委員会にも呼び掛けてみてはどうかと考えています。みんながどんな表情で登校してくるのか、そして、挨拶をする時のドキドキ感。「元気がないな？」と感じた時、自分が挨拶をして少し笑顔になってくれた時の嬉しい気持ちなどを多くの人に感じてほしいと思います。その経験を、それぞれのもの見方や考え方に活かし、二島中学校が今よりもっと明るくにぎやかになっていけばいいなと思っています。

みなさんも是非「挨拶」から始めてみませんか。二島中学校区の小学校とも連携して、現在、あいさつ運動とオレンジリボン運動を進めています。人の輪が広まれば、今よりもっと明るく楽しい明日が待っているはずです。そしていつか、気持ちの良い挨拶が北九州市の街に広がり、安心・安全で誰もが住みやすい、いじめのない街になっていけばいいなと思います。その実現のために、これからも自ら率先して頑張っていきます。

